



新日鐵住金

2018年度2Q決算説明会（2018年11月2日開催）
質疑要旨

注：説明会開催時点の情報に基づく内容です。

説明者 代表取締役副社長 宮本 勝弘
 執行役員財務部長 石原 秀威

Q 自然災害影響がなければ、8月2日時点の見込みに対して増益になっていたという認識でよいか？

A 自然災害の影響が、8月2日時点の見込みから250億円増加し、上期270億円、下期80億円、年度で350億円の減益要因となった。上期は国内の販売環境も良く、海外市況も想定以上に堅調に推移した。従って、本来であれば8月時点の損益見通しよりも増益となっていたところだが、結果的には見通し並みにとどまった。

Q 足元、主原料価格が上昇しつつある。また、海外の熱延価格も下がりつつあるようだ。下期の見通し損益には、ある程度のリスクバッファーが含まれているのか？

A 下期の見通し損益の主原料価格の前提は、強粘結炭が200\$/トン程度、粉鉱石が60\$/トン程度。損益見通しを想定して以降、足元では若干市況価格が上昇しているため、この水準が継続すると仮定すれば、主原料契約価格も想定より上昇する可能性がある。一般的には、原料価格が上昇する際は鋼材需給もタイトであり、鋼材の市況価格も上昇しやすい環境となるので、販売価格改善を進めていきたい。

ただし、海外の市況はご指摘の通り弱含んでいるが、当社の損益想定には一定レベルの海外市況の低下を織り込んでいる。

Q マージンについて教えて頂きたい。8月2日時点の上期見通しから上期実績でのマージン改善90億円の要因は何か？また、上期実績から下期ではマージンの改善が織り込まれていないが、販売価格の更なる改善に取り組まれている中で、何故マージン改善を織り込めていないのか？



A 海外市況が当初想定より高い水準で推移したことに加え、国内でも想定していたレベルに対し、一定以上の価格水準となったことが、8月2日時点の見通しに対してマージンが改善した要因。

下期は、国内市況は堅調だと見ているが、海外市況は足元水準をベースに少し慎重な見方をしている。一方、主原料コスト以外に、これまで、合金等の市況原料や物流費などのコストが上昇しており、これらのコストプッシュについても販売価格への反映を交渉していく。このような状況を踏まえ、現時点では下期のマージンを上期横ばいレベルで織り込んでいる。

Q 生産トラブルについて伺いたい。第2四半期は、自然災害による減産に加え、自社要因で30万トンの減産になったというご説明だった。どのような現象が生じているのか？

A 中核製鉄所において、高炉の炉況が芳しくなかった。因果関係は明確ではないが、豪雨の影響があった可能性はある。その他にも、いわゆるチョコ停と言われるような小トラブルが続いており、そうした影響が積み重なって減産になった。

Q エッサール・スチール社（以下、エッサール）に関して伺いたい。公称能力10百万トンに対し、実績の生産量は6.5百万トンとのご説明だったが、設備的に何か大きな問題を抱えているのか？現状の生産水準で利益は出ているのか？生産量を8.5百万トンまで拡大するということであったが、その時間軸についても教えて頂きたい。

A エッサールの上工程には3つのプロセスがあるが、LNGを使用するMidrex®のコストが高く、経済性の観点から、10百万トンの能力に対し6.5百万トンで操業しているのご理解頂きたい。6.5百万トンレベルでもEBITDAは相応のレベルにある。買収後は、上工程の最適化を進めることで8.5百万トンの生産を実現しようと考えている。実現時期については、設備の建設にかかる一般的な工期をイメージして頂ければよいと思う。

Q エッサールの買収に関して、御社のキャッシュ負担の規模、キャッシュアウトのタイミング、リターンが生まれる時期等に関して、具体的にご説明頂けないか？

A 現在、会社法裁判所で審査が行われており、各国の競争当局の認可も必要で、それらの承認が得られた後、ジョイントベンチャーを設立した段階でキャッシュアウトが生じることになる。4,200億ルピーで債権者に債務を弁済する。資金注入する800億ルピーと、エッサール自身が生み出すキャッシュフローを合わせて、先ほどご説明したような設備投資を行っていく。

プロジェクト運営の精神としては、北米でのジョイントベンチャーと同様に、当社とアルセロール・ミタル（以下、AM）とで対等の精神で運営していく。しかしエッサールの再建計画に実際に入札しているのはAMであり、AMがマジョリティになる。

エッサールは足元でも相応のEBITDAを出しており、一年目から利益貢献するものの、それだけではリターンとしては十分とは考えていない。上工程を中心としたプロセス

最適化を施し、生産量を8.5百万トンまで拡大することで十分な利益貢献が得られると考えている。当社としては、それらのキャッシュフローの規模や時期を踏まえ、投資に対するリターンが十分に当社のハードルレートを超えることを確認した上で投資判断を行った。

Q 全体の事業ポートフォリオの考え方について伺いたい。従来は、自動車用鋼板や高級鋼管といった、高付加価値品分野に注力されてきた。最近の買収戦略の中でも、特殊鋼分野に注力する等、高級品分野で勝負するという考え方と想っていた。これに対し、エッサールの買収はインドの需要の捕捉が目的となっており、汎用鋼の分野に巨額の投資を行う計画と理解している。どのような事業ポートフォリオの考え方で、今回の投資判断を行ったのか？今後の投資の方向性は？

A 当社の事業ポートフォリオとしては、自動車用鋼板や高級鋼管、建材含めた高級品が中心であることに変化はない。オバコ社の買収・山陽特殊製鋼の子会社化もその路線に沿って実行している。エッサールの買収についても、現時点では、インドの需要は汎用鋼が中心だが、いずれは産業構造の高度化に伴って高級化が進むものと考えている。インドは土地の購入が困難であるなど、新規参入が非常に難しい国であり、まずはインサイダーになることが重要と考えている。インサイダーとなっていれば、産業構造の高度化に伴う鋼材需要の高級化の流れにもしっかりと対応できると考えている。

以上

本資料は、金融商品取引法上のディスクロージャー資料でなく、その情報の正確性、完全性を保証するものではありません。また、本資料に記載された将来の予測等は、説明会の時点で入手可能な情報に基づき当社が判断したものであり、不確定要素を含んでおります。従いまして、本資料のみに依拠して投資判断されまことはお控えくださいますようお願い致します。本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。